

FLORA KANAGAWA

神奈川県植物誌調査会
ニュース 第20号

Sep. 20. 1985

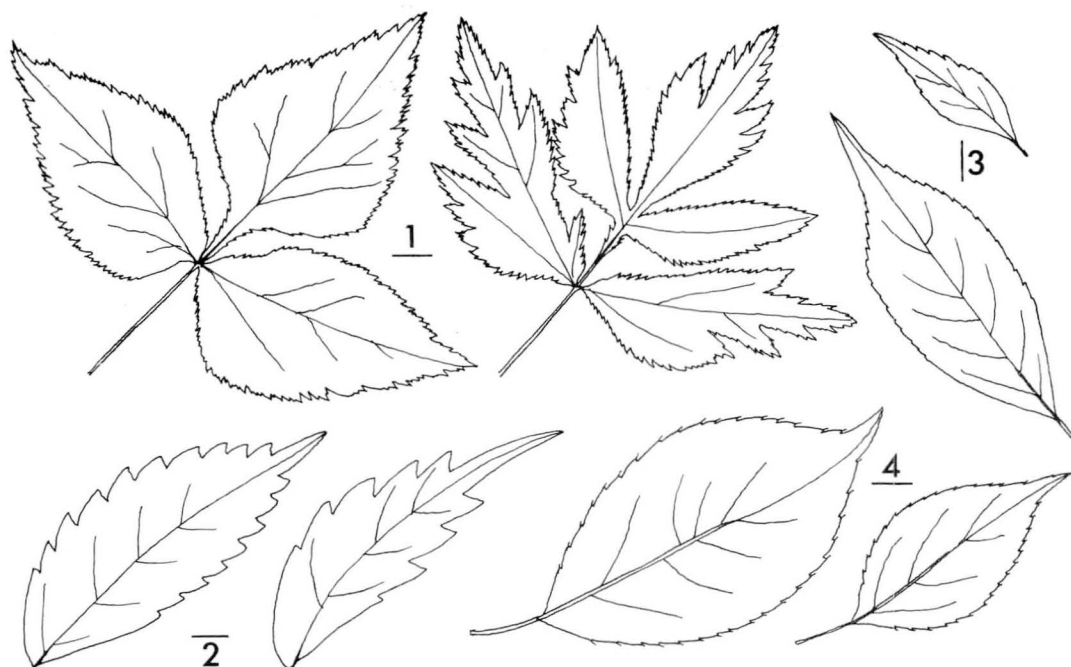
No. 20

231 横浜市中区南仲通り 5-60

神奈川県立博物館内

神奈川県植物誌調査会 (振替 3-10195)

TEL. 045-201-0926



1. ミツバ *Cryptotaenia japonica* (左) と ウシミツバ *f. dissecta* (右)
2. ウワバミソウ *Elatostem umbellatum var. majus* (左) と ヒメウワバミソウ (学名上は母種) (右)
3. ムラサキシキブ *Callicarpa japonica* (下) と コバノムラサキシキブ *f. taquetii* (上)
4. ハナイカダ *Helwingia japonica* (左) と コバノハナイカダ *var. parvifolia* (右)

所変われば・・・

今春から、湘南ブロックのメンバーで、西湘地区の東海道沿線のメッシュの調査をお手伝いすることになった。所変われば・・・とはよく言ったもので、ナベワリ、ハナミョウガ、ヤマジオウ、ヒメバライチゴなど、今まで湘南では見たことのない植物に何種類も出会うことができた。

また同じ種であっても、西湘に行くときよく目立つ変種や品種もあり、そのいくつかを図示してみた。これらは

丹沢などにもないわけではないのだが、やはり西湘の箱根山麓の方が目立つ感じがする。地理的な分布に一定の傾向があるのではないだろうか。

4月からの西湘地区での成果は、OD-1, 2, 4, MAN, YU-1, 2の6メッシュで、合計約1000点の増加である。特に今まで標本の少なかったYU-1, OD-2などが、多少、かっこがって来たところであろうか。(浜口哲一)

西湘地区の調査より

真鶴町調査メモ

真鶴町の町民健康セミナーの野外薬用植物観察に顔を出した関係で、町内の薬用植物の標本を作ることを考えていたが、メモによる種類の多い当町の分布調査を行いながら、その標本を作ることを計画してみた。

真鶴と言えば、海岸暖地性の植物の多い真鶴半島が目の前に浮かぶが、地図を見ると、南北約8km、中央の巾が約2km、両端の細くなった形をし、北部はやや急斜面の箱根火山外輪山の標高700mまでに達し、南半分は半島となって海中に長く突き出ている。全町、箱根火山外輪山の裾にある町である。

そのため植物は、海岸暖地性から箱根の山地性のものまで含まれ、種類数は相当多いと思われる。現在、データは767になっているが、メモによるものが3分の1も含まれている。また北部の外輪山山腹部面の調査は不十分であるとのこととて、この方面の調査から始めることにした。

5月も下旬になってからの27日と31日の両日、第一回の調査採集を行った。両日とも、真鶴駅よりバスで終点岩バス停まで行き、中央を流れる岩沢川沿いの林道を進む。人里をはずれた山腹は、ほとんどスギ、ヒノキの人工林で、危ぐしていたミカン畑は見あたらず、標高400mあたりを横切る白銀林道まで出る。平塚あたりでは、もうとうに花の散っているコゴメウツギをはじめマルバウツギなどが花盛りで、高さを示していた。初日はこの林道以下の調査を行い、次の31日には、更に上の部分に入り、標高500mを越える部分まで登ったが、その辺からは植林間もないややなだらかな斜面となり、林道も急に消えてしまったので引き返した。両日で100種余りの収穫を得た。

・メモによる種類で採集できたもの

オオベニシダ、クリ、ケヤキ、イヌツゲ、エゴノキ、サルナシ、ツクバネウツギ、フユイチゴ、マツカゼソウなど44種類。

・新しくリストに加わったもの

イワヒメワラビ、クサソテツ、ミヤマイボタ、イヌシダ、イノデモドキ、アブラシバ、コアジサイ、コガンピ、シラキ、タニギキョウ、タンナサワフタギ、トンボソウ、スノキ、ナガバノスミレサイシンなど64種類、その他数種類の同定を要するもの等があった。なお山中の路傍でのヒレハリソウ、シマヨシ、キンシバイや、人家付近の空き地でのユウゲシヨウなどの逸出種も、その中に含ま

れていた。

第2回目も近日中に半島部分で行い、暖地性のシダをはじめとするメモ種の標本採集をする予定である。

(守矢淳一)

湯河原2の山地部

湯河原は既に596種が報告されていますが、山のものが比較的少ないようでしたので、6月2日と4日の二回、新崎川に沿って車で入り、浄水場前へ車を止めて付近を歩いてみました。

一日目は、幕山ハイキングコースを途中迄のぼり、以前ミカン畑だったらしい林を下って川へ出、川岸を100mほど歩きましたが、若い人達が大勢ロッククライミングの練習をしていて、山は、ゴツゴツした大きな岩の多い山で、ハイキングコースに高い山はほとんどなく、草原のあちこちにヤマテリハノイバラやマルバウツギの白い花が咲き、ノアザミがあたり一帯を赤紫色に染めていました。

林の中はキブシとクロモジの木が多く、又林を出はずれたあたりの斜面ではオオカナワラビ、ホンバカナワラビ、イノデモドキ、オオベニシダ、イワヒメワラビなどのシダ類を採取し、又フウトウカズラが一面に地をおおっているのを見ました。

川の流れの近くでは、クリハラン、イワガネゼンマイ、ヒロハコンロンソウ、ミヤマタゴボウ、マルバノホロシ、オランダガラシ、ミゾホウズキなどを採取しました。

二日目は時折雨がパラつき雷の鳴る中を、川の対岸のしとどの窟への道を歩きました。こちらは杉や広葉樹におおわれた林の中の道で、マルバウツギ、ガクウツギ、コアジサイの花を眺めながら、サルナシ、ミヤマシキミ、ミヤマウコギ、ウリハダカエデ、ウリノキ、イヨカズラ、ミヤマカタバミなどを採取、ジャケツイバラの花も見られましたが、残念ながら手がとどかず、花のない枝を取ることが出来ただけでした。道に散っていた花を拾って来なかったことが悔やまれます。

途中の小さな流れのわきで、クワガタソウ、ヤマトウバナ、オオギカズラ、ミズタマソウ、イワボタンなどを採取し、しとどの窟では花はまだでしたが群生しているヤマジオウ、石垣のイワタバコやハイホラゴケ等を採取し標本にしました。

湯河原は、平塚や大井などとは違った植物相が見られ、採集の楽しみもあるので、今後も機会をみて歩いてみたいと思っています。

(山口育子)

湯河原1 調査メモ

当調査もおしつまった今年、5月より湘南ブロックではYU-1も調査することになりました。

5月23日、不動滝でバスを降り、藤木川に沿い奥湯河原へ、そこから天照山神社、白雲滝までを往復した。

ハイホラゴケ、ウラジロ、ツルデンダ、テキリスゲ、ヌカボシソウ、コチャルメルソウ、ミヤマチドメ、ボロギク等採集。(参加者、守矢、山口、斉藤、三輪)

5月28日、東海道線より海側の市街地を調査、YU-1の海は新幹線トンネル工事で出た土で埋め立てられ、テトラポットが並び植物は見られない。道端、空き地、公園などで、シラゲガヤ、ヒメコパンソウ、ウラジロアカザ、ツルナ、オランダガラシ等を採集。(参加者 三輪)

6月15日、温泉場下車、湯河原新道の若草山トンネルの上と北側山地。東に進み同新道をくぐり、厚生年金病院までを調査。イワガネゼンマイ、ホラシノブ、ノコギリシダ、ハナミョウガ、ササバギンラン、ムベ、イズセンリョウ、センブリ、ムラサキニガナ、キクアザミ等を採集。(守矢、斉木、三輪)

以上3回の調査で400種を採集。(三輪徳子)

小田原を歩く

○小田原城山地区 (OD-2)

4月25日、はれ。同行 守矢、浜口、山口、斉藤。小田原3地区のうち、一番調査不十分の所。花の咲いているものは、何でも採集しようと取りかかる。時期も天気も良く何組かの可愛らしい遠足の子供達に逢う。

城跡公園の裏側から、城に向かう。登りはじめると、守矢先生が、タニギキョウの群落を見つける。この付近にはシダも多く、フユノハナワラビ、フモトシダ、イノモトソウ、イワガネソウ、ホラシノブ、ドウリョウイノデ、アイアスカイノデ、ハカタンダ、コバノヒノキシダなどを守矢先生採集なさる。石垣のきわの水気の多い所にジャニンジンが。十株以上あったらうか。

雑木林の中では、山口さんがチゴユリを採集する。今回は、照葉樹林、雑木林、はたけ、水田と、変化に富み百種以上の収穫があった。

○早川河原・石垣山 (OD-4)

6月15日、薄曇り。浜口、山口、斉藤で調査。予定していた13日(木)、野外調査が雨で中止になり、梅雨の晴れ間の今日になる。入生田で降り早川の河原を歩く。土曜なので、釣り客も多い。

河原で、タチクラマゴケ、ハコネシダ、ホラシノブ、ヤブスゲを。また時期はずれではないかと思った、アオカモジグサ、ドジョウツナギ、トボシガラなども採集できた。その他、ミヤマタゴボウ、ヤナギイチゴ等も見つかる。

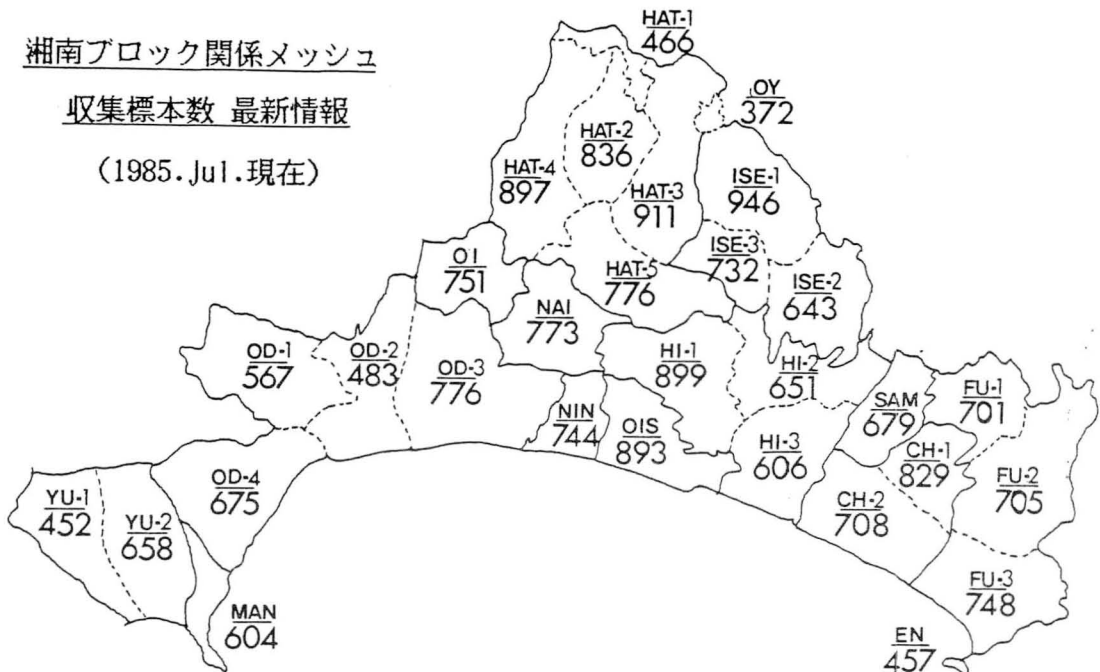
石垣山に向かう途中エゾタチカタバミ、コバノハナイカダ、キジョラン、ムカゴイラクサ、サンカズル、ホソバシオデ、イズセンリョウ、ホガエリガヤ、イワガラミ等。

最後に海岸に出て、港、埋立地を歩く。ムラサキエノコロ、ニワホコリ、ミチヤナギ、キキョウソウ、ノボロギク、アレチノギクを採集。(斎藤溢子)

湘南ブロック関係メッシュ

収集標本数 最新情報

(1985. Jul. 現在)



『神奈川の春はどこからくるか』

神奈川県植物誌調査会

1 はじめに

神奈川県植物誌調査会では、1979年から続けてきたフロア調査の結果をまとめて「神奈川県植物誌」を刊行することを予定しているが、その項目の一つとして「植物季節」をとり上げることになった。そのために計画されたのが、「神奈川の春はどこから来るか」と題する開花季節調査である。

開花などの生物現象と、季節変化の関わりを調べることは、生物季節学（フェノロジー）と呼ばれている。その身近な例としては、気象庁の行っている、ソメイヨシノの開花日の予測や、開花前線の記録があげられる。特定の植物の開花季節の地域によるずれを調べることは、気候条件の違いを植物を指標として把握することであり、応用生態学的にも重要な意味を持っている。また、こうした調査は、アマチュアの参加が大きな貢献をなしうる分野であり、事実、アメリカでは多数のボランティアの協力によって、アメリカハナミズキなどの開花期と紅葉期の広域的な調査が行われている（Reader他1974）。広域的な開花季節の調査は、ヨーロッパでも盛んに行われているが（Lausi 1973など）、日本では、気象庁によ

図1. 調査用紙

[神奈川の春はどこから来るか 1985] 記録用紙
 メンブ () 地点 N. (地図に記入)
 地名 環境 自治体 田・水田・雑草林・川原
 土地
 調査日 1985年4月6日(日) 調査者
 (○で囲む)
 ○: 観察日時、△: 観察日時、●: 観察日時、◎: 観察日時、×: 観察日時
 (○で囲むは記入、△は記入、●は記入、◎は記入、×は記入)

種類	開花状況	種類	開花状況
アサギバナ	○-△◎◎×	ササキナギ	○-△◎◎×
アサヒ	○-△◎◎×	セイウチバナ	○-△◎◎×
アサガハ	○-△◎◎×	ササギバナ	○-△◎◎×
オオシロ	○-△◎◎×	ササギバナ	○-△◎◎×
オドリコソク	○-△◎◎×	ツギミ	○-△◎◎×
オカキバナ	○-△◎◎×	ハルジオン	○-△◎◎×
オカキバナ	○-△◎◎×	ヒメツグ	○-△◎◎×
オカキバナ	○-△◎◎×	ヒメツグ	○-△◎◎×
オカキバナ	○-△◎◎×	ヒメツグ	○-△◎◎×
オカキバナ	○-△◎◎×	ヒメツグ	○-△◎◎×
オカキバナ	○-△◎◎×	ヒメツグ	○-△◎◎×
オカキバナ	○-△◎◎×	ヒメツグ	○-△◎◎×
オカキバナ	○-△◎◎×	ヒメツグ	○-△◎◎×
オカキバナ	○-△◎◎×	ヒメツグ	○-△◎◎×
オカキバナ	○-△◎◎×	ヒメツグ	○-△◎◎×
オカキバナ	○-△◎◎×	ヒメツグ	○-△◎◎×
オカキバナ	○-△◎◎×	ヒメツグ	○-△◎◎×
オカキバナ	○-△◎◎×	ヒメツグ	○-△◎◎×

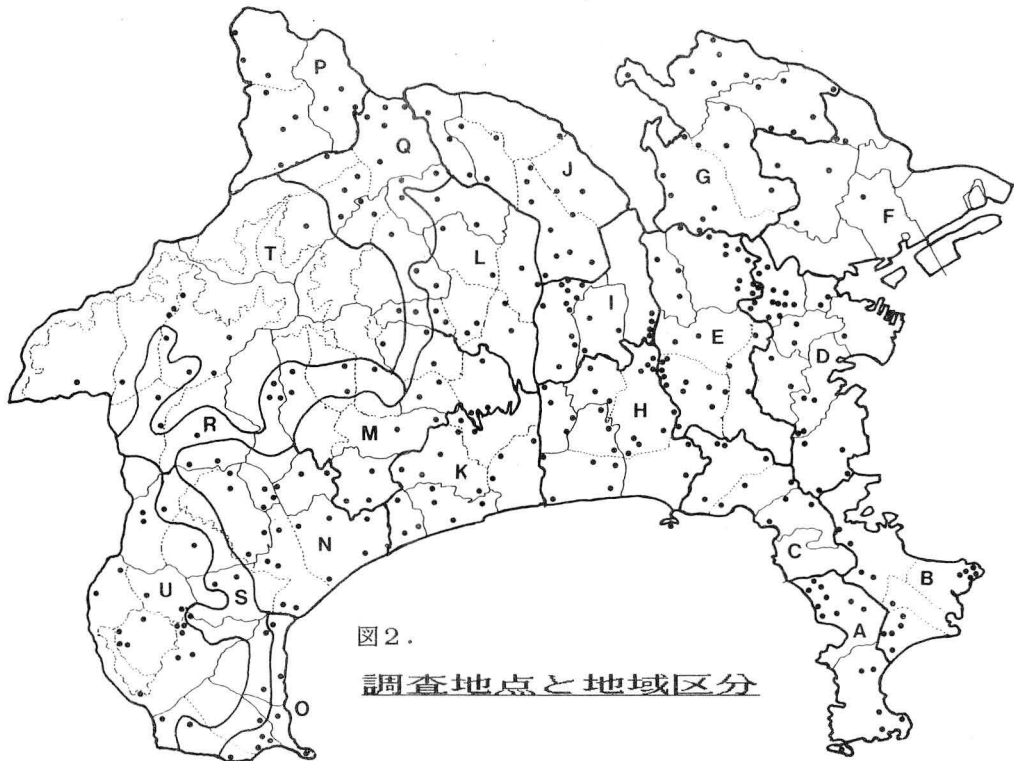


図2. 調査地点と地域区分

2 目的と方法

本調査の目的は神奈川県内では、春の花がどの地域で早く咲き出し、どのように開花が進んでいくのかを知ることである。またそうした地域による違いが、気候、標高、海岸線からの距離などの条件と、どのような関連をもっているかを把握しようと考えた。

観測以外にはほとんど行われたことがない。そのため、今回の調査にあたっては、方法、対象種の選定、結果の整理のいずれをとっても試行錯誤の面が強く、内容的に不十分な点が多くなってしまった。ここに報告する内容も、結果の一応の整理といったものであり、多くの方々から意見を伺ったうえで、さらによい整理と、今後の調査方法の向上を目指していきたいと思う。いろいろな指摘がいただければ幸いである。

本調査は、本会会員を中心として67名1グループ^oの参加によって行われた。その氏名は文末に記した通りである。結果の整理は、平塚市博物館の浜口哲一が担当し、本稿の文責は浜口にある。また、文献の入手に御協力いただいた、東京大学林学科の大野啓一氏に感謝したい。

こうした目的で調査を行うには二つの方法がある。一つはいくつかの種類の植物を選び、各地域で観察している人に、開花を認めた日を報告してもらい、開花日の違いを地図上に表現して、解析するものである。もう一つは、特定の調査日を決めて、一斉に各地域で調査を行い、何種類かの植物の開花状況を比較することによって、解析を行うものである。前者の方法は、開花日が分析の対象となるので数量的に扱いやすいが、神奈川県というようなせまい地域の調査では少なくとも2、3日おきに観察しているフィールドがないと、比較が可能な精度を持った記録がとれないという難しさがある。そこで、今回は、多くの人が参加しやすいということを第一条件として、後者の方法をとることにし、4月6日(土)～8日(月)の3日間を一斉調査日とすることにした。

調査の対象とする種類としては、県内に広く分布し、普通に見られること、近似種が少なく識別が容易なこと、4月初旬の開花状況のパラエティアーを考慮に入れ、雑木林周辺で見られる16種と、農耕地周辺で見られる14種の合計30種を選定した。また、その他に見られた植物についても記録をとり、補足的な検討ができるようにした。

記録内容としては、各種類について、発見できない、つぼみがない、つぼみ、咲き始め、満開、咲き終わり、若い実の7段階に分けて記録をするようにした。記録用紙は、図1に示した通りである。

調査地点は、植物誌調査のメッシュによって担当者を決め、各メッシュで2～3か所以上、調査を行うことに

して、具体的な地点は各調査者に一任した。調査者には10万分の1の地図を渡し、そのうえに調査地点を記入してもらい、記録用紙と対照できるようにした。

3 結果と考察

1 調査の実施状況

一斉調査を予定した4月6～8日の天候は、6日は晴、7日は曇後雨、8日は曇一時雨であった。特に中心的な調査日であった日曜日の後半に天気が崩れたため、調査の精度としてはやや不十分なものとなってしまった。

調査を実施したメッシュは標高1000m以上の8メッシュを除く全県100メッシュの内、96メッシュであり、ほぼ全県的に調査を行うことができた。合計調査地点は図2に示したような342地点で、1メッシュあたりの平均調査地点数は3.6であった。

2 記録整理の方法

調査記録の整理としては、調査地点を記した地図上に、各地点の開花状況を記入し、各種類毎の開花状況図を作成した(図3)。一地点で、一種類の開花状況として、二つ以上がマークされている場合もあるが、その時には、つぼみと咲き始めなら咲き始め、咲き始めと満開なら満開、満開と咲き終わりなら満開、咲き終わり若い実なら咲き終わりというように、満開を中心として、それに近いマークを優先して、地図上に記すようにした。

地域的な比較を行うため、全県を、A～Uの21地域に分けた(図2)。開花季節には標高が重要な影響を与えていることが予測されたので、200m以下、200～400m、400m以上の3地域にまず区分し、それぞれ、メッシュの組み合わせによって、15、4、2の地域に区分した。1地域あたりの調査地点数は、最低6、最高33、平均16.3である。

地域による開花状況を比較するため、開花指数を算出した。これは、つぼみなし：0、つぼみ：1、咲き始め：2、満開：3、咲き終わり：4、若い実：5、という点を与えて平均したものである。発見できなかった地点は平均には加えなかった。

3 各種類の開花状況

調査の対照とした30種類の開花状況を図3に示した。全県的にもっとも開花の進んでいた植物はフキであり、大部分の地点で咲き終わりの状態であった。これに次ぐのがキブシ、シバヤナギ、タチツボスミレ、ヒメオドリコソウなどであった。また、開花の進んでいない植物としては、コナラ、ホウチャクソウ、オオジシバリ、ノアザミがあり、これらはほとんどの地点でつぼみか、つぼみも見つからない状態であった。

種類による平均的な開花の進み具合を比較するため

に、200m以下のA~Oの15地域の開花指数を平均して、図4に示した。なお、記録されなかった地域の多いアカネスミレなどの5種類は省略してある。この図は、開花の平均的な順序を示しているといえる。

それぞれの開花状況の分布を見てみると、より標高が低い所ほど、また、より南の地域ほど開花が進んでいる一定の傾向は認められるが、開花の進行は、明瞭な開花前線が引けるような形で進んでいるのではなく、あちらこちらで同時進行的に咲き出す形で進んでいる。例えばハルシオンでは、湯河原方面や三浦半島で開花が早いのは明らかだが、咲き始めの地点は、丹沢山麓や津久井などにも広く及んでいる。このことは、面積が狭く、200m以下の低地が大部分を占める神奈川県が、地域的な気候の差が小さいことを示しており、各地点の日あたりなどの局地的な条件の影響が、開花状況の記録に大きく現れ

ていると考えてよいだろう。

4 地域による開花状況の比較

前項で述べたように、図3に現れた結果は、各地で同時進行的に開花が起こるというものであるが、全体的には一定の傾向が認められるので、それを開花指数によって検討してみた。各地域で種類毎に開花指数を算出し、さらにそれを雑木林と農耕地の種に分けて、地域毎に平均したのが図5である。

それによると、県内の開花の進行には2つの傾向が認められた。第一は、当然のことではあるが、標高の高い地域は、開花の進行がはっきりと遅いということである。第二は三浦半島南部がもっとも開花が早く、三浦半島中北部と湯河原方面がこれに次ぎ、内陸部へと徐々に進行していくという傾向である。個々の種についても、開花指数で比較すると、概ねこの傾向は認められる。ただし、

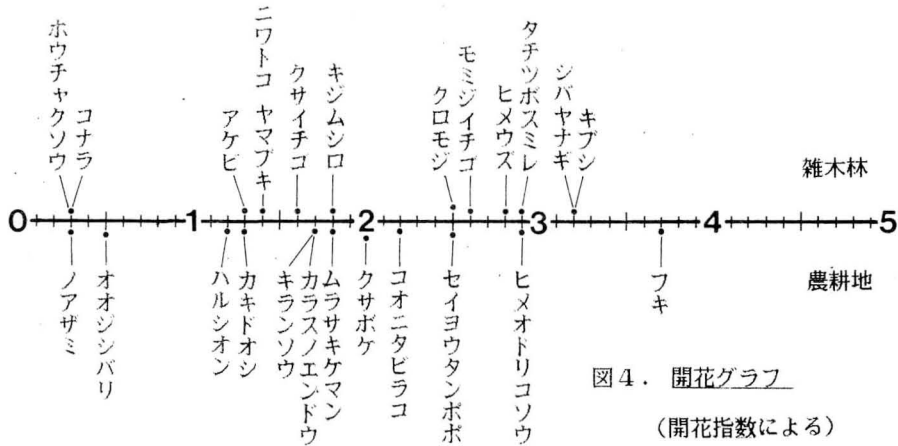


図4. 開花グラフ
(開花指数による)

図5. 開花指数の分布 上段の数字：雑木林開花指数 下段の数字：農耕地開花指数

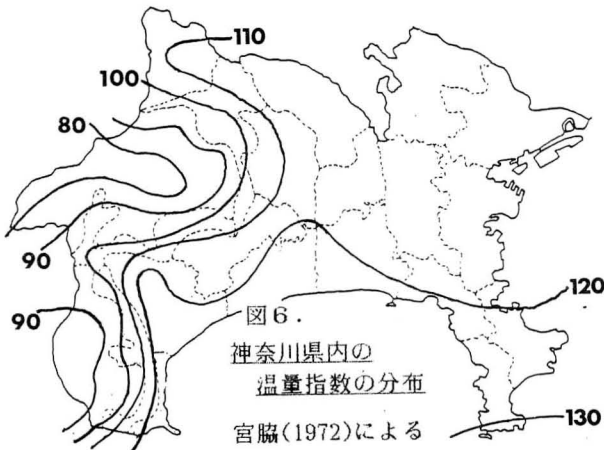
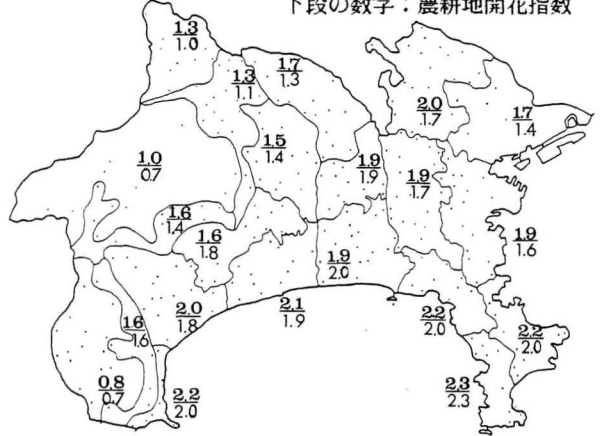


図6. 神奈川県内の
温度指数の分布
宮脇(1972)による



オドリコソウのような例外的な種は、さらに検討を加える必要がある。

植物の成長と関係の深いと考えられている気候要素の一つに温量指数というものがあるが、その県内の分布を図6に示した。今回得られた開花指数の傾向と、温量指数の傾向はよく一致しており、低地部の広い範囲で同時に開花が始まることも、よく説明できる。

以上述べてきたように「神奈川の春はどこから来るか」という問いに対する、今回の調査で得られた答えは次のようなものである。

「神奈川の春は三浦半島南部に始まり、海岸部から内陸部、さらに山地部へと進んでいく。しかし、その進行は隊列を組んだ軍隊が整然と進むようにはなく、同時多発的なゲリラがやがて全体を制圧するように進む。」

○参考文献

Reader他(1974):「Modeling Important phytophenological Events in Eastern North America」『Phenology & Seasonality Modeling』p329~342,

Lausi, D. und S. Pignatti (1973):「Die Phanologie der europäischen Buchenwalder auf pflanzensoziologischer Grundlage」『Phytocoenologia』1(1) p 1-63

宮脇昭 1972:『神奈川県の現存植生』神奈川県教委

○調査参加者 (順不同)

平松俊子・吉川アサ子・中村真子・黒沢一之・森茂弥・勝山輝男・林辰雄・樋田五百枝・岡部美会・守矢淳一・武井尚・長岡・石渡治一・日野智恵子・山本明・米山智恵子・千々部愛子・秋山守・八田羽栄一・山口育子・高橋節郎・山口勇一・斎藤溢子・北川淑子・大熊裕子・三輪徳子・佐々木あや子・住吉静子・村上司郎・小座間国雄・守野りゆう子・大森雄治・内藤美知子・神田忠良・緒方美代子・内田光雄・荻沢一郎・斎藤恵子・西山清治・長谷川義人・萩原恭一・北谷典子・藤野知弘・鈴木慶司・門倉サチ子・大前悦宏・大森庄次・黒川光慶・永田芳男・斎木操・根本平・浜中義治・水上重夫・鈴木一喜・サークル「いそぎく」(代表・山下道恵)・森百合子・羽野雅子・蒔田かをる・城川四郎・早川亮太・本多まさ子・深瀬徳子・勝山智男・石井藤太郎・松浦正郎・大場達之・高橋秀男・浜口哲一 以上 67名1グループ

☆参加者の感想より

・雨が降っていなければ、もっといろいろの植物が調査出来たと思い、残念でした。道志川ぞいの村を長靴にカッパ姿で調査し、カタクリの花の群生を見つけて、とても感動しました。(TS-3 門倉サチ子)

・調査法は適切だったと思います。あってもよいはずの植物も開花していないと見過ごしてしまうようです。3ヶ所くらいをもう少しゆっくり見るべきだったと思いました。(YA-6 城川四郎)

・コナラのつぼみや開花状況を見るのは難しい。雑木林の中では、コブシ、アオキなどの開花状況は見やすい。

(FU-2 小座間国雄)

・開花状況が△か●なのか判断が難しく、前後一週間ほど観察して決定しました。調査地点は同じような環境も選んだ方がよいか、日の当たり方によっても大きな違いがあるので迷いました。担当した大楠山周辺は比較的暖かい地域だと思いますが、日程はもう一週間遅い方が、他地域との差が出たのではと思いました。

(YO-4 斎藤恵子)

・調査法は簡単出やりやすかった。又、来年同日にやってみたいと思う。行きに気が付かなかった種類が、帰りに記録できたこともあった。2人1組で調査した方が効果的なのではとも思った。(CH-1 斎木操)

・県内一斉に開花の状態を観察し、状況を段階に分けて記録することは、たいへん有意義なことで、大いに協力賛意を呈します。種類及び今後も継続するかのことにご配慮下されれば幸いです。(MIU 鈴木一喜)

・カキドオシが見あらず、4~5年前には珍しいと思ったヒメオドリコソウが至るところで繁茂しているのに驚きました。ただヒメオドリコソウ等は咲き始めか満開かの区別がつきにくく思います。タンポポも同様に、どちらにしようか迷いました。同じ場所でも日当たりとか、立地条件で咲き方が違うので、二つ以上マークしたものもありました。(KAZ 内藤美知子)・開花状況

は個体差や生える環境(特に日照度)によってかなり変化があるので、同地点でも、どちらに選定してよいか迷うものもある。また雨天の場合、花を閉じてしまうキジムシロやコオニタビラコなど、植物に対する調査者の認識度も問題と思われるので、統計をする場合、調査日の天候も加味した方が無難と思う。調査者が同じレベルであれば問題はないが…。(ZU 永田芳男)

・去年まで雑木林だった所がほとんど宅地造成され、カキドオシ、ムラサキサギゴケなどちょっとした雑草さえ生える場所がなくなってしまった。(ISO 中村真子)

・同地点でも場所により開花状況が異なっていた。一人だけの記録では見落としが多くあると思う。

(Y0-5 西山清治)

・林内と林外、日だまりと吹きさらし、南向きと北向きの土地等でも、開花状況にかなりの差が感じられた。本年度の3月末から4月初めは異常低温や、雨天が多いなどで、平均的な春の到来の調査とは言えないかもしれない。同地区内でも、開花状況に差が出てくる場合の判断が難しい。ホトケノザ、アオキも広く分布しているので参考になるのでは。

(T0-2 萩原恭一)

・雨の中を行ったので、晴れていれば開花しているであろうものも、つぼみとして記録してしまった可能性が大きい。カントウタンポポはかなりの株で花がついていたが、セイヨウタンポポではつぼみのついていない株が多くあり、咲いている頻度としては、カントウタンポポが上だった。

(EB 羽野雅子)

・湯河原パークウエーの標高800m地点では、キブシは△が多く、直線距離で1.5km程度しか離れていない、標高350m地点(◎が多い)とは明らかに異なる。キブシの開花度を数的に表す工夫をすれば、良い指標になるのではないか。

(TU-1 早川亮太)

・柏尾川沿いでは、調査対象の植物が少ないのに意外な感をうけましたが、これは河川の改修工事が進み、堤防沿いの道も舗装された部分が多いためだと思います。

(T0-3 林辰雄)

・生育場所の状況により、開花状況の差が大きく、日照などの差で、つぼみから満開までであった。また日照不足や土質の関係か枝葉は伸びていても、花芽をつけていない株も多かった。季節を追って、年何回か実施すると更に興味深い。

(ZA 藤野知弘)

・カントウタンポポが圧倒的に多く、ミミナグサの数も多かった。まだ自然度が高いと思った。昨年は確かに樹木が繁っていた場所が、伐採され、予想していた結果がはずれたものもあった。

(EB 蒔田かをる)

・芦ノ湖畔で標高730mですので、調査対象となる草花も殆ど見あたらず、当然ながら平野や山麓と比べて開花している草木は非常に少なく、木々の芽生えもこれからという感じでした。

(HAK-4 水上重夫)

・傘を片手にヘビに出合わぬことを祈りつつ藪の中へ。春先にもかかわらず木々がうっそうと繁り、ヤブツバキの赤い花が目立つ。クリとウメの林ではヒメオドリコソウ、ナズナ、オオイヌノフグリ等の群生の美しかったこと。野草のじゅうたんであった。ニリンソウはまだつぼみが固く、昨年より開花が遅いようだった。オオヒナノウスツボが3ヶ所で若芽を出していた。駅前の狭い場所でも宅地造成工事が行われており、毎年土の下に埋もれてしまう植物が多い。昨年もアズマイチゲ、ニリンソウ、イチリンソウ、ツリフネソウなどの群生が土の下に埋もれて消失してしまった。わずかに農家の裏山や道路沿いの土手に残されているのが救いだが、あと何年花が咲くのが見られることだろう。

(EB 森百合子)

・若芽、花の咲いていない木、似ている花、図鑑を片手に自転車を走らせました。北へ数キロ、走っても走っても相模原市内で、改めて広さを感じてしまいました。ちょうど市の桜祭りで、桜は咲き始めてまだピンクにぼやけている程度でした。雑木林をのぞき、すべて人の手で管理されており、自然は少なくなりつつあります。

(SA-4 守野りゅう子)

・1日、朝から歩いてみましたが、いろいろなことがわかって面白かったです。シダ類の葉の芽立ちのようすも、前の記録と比べてみて確認できたことがあります。

(AT-4 山本明)

・植物の選び方、調査法、調査日など誠に目的に叶っており、調べながら感心しました。湯河原は北が山で、傾斜地が大部分ですので、海拔を記しておきました。海拔70mと260mで開花状況に差が出ておりますので、広い神奈川全域ではどのように表れるのか結果を楽しみにして居ります。

(YU-2 米山智恵子)

◎事務局より

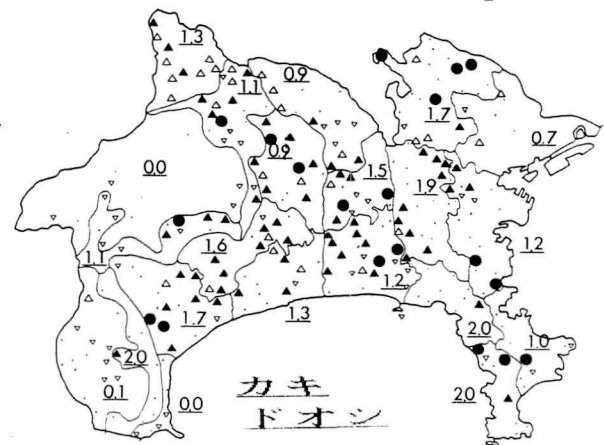
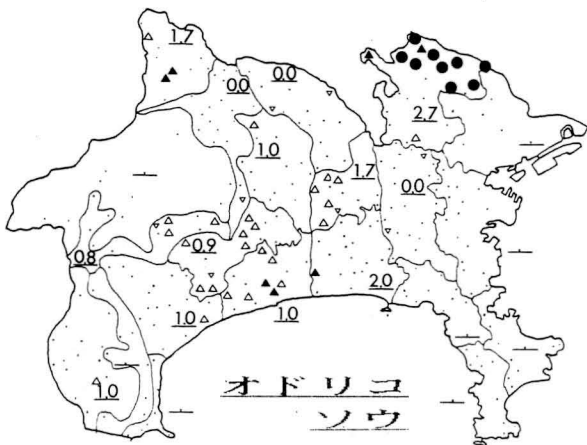
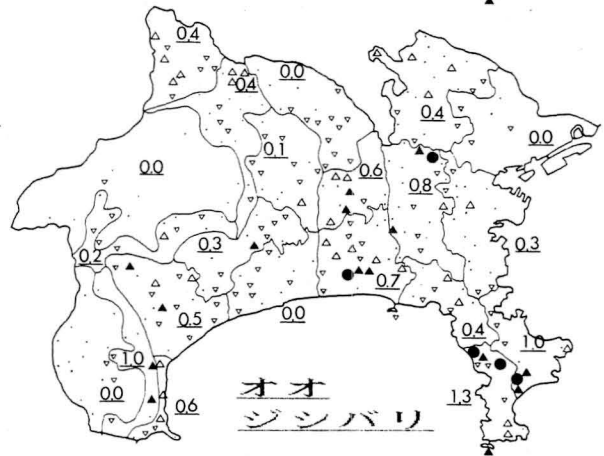
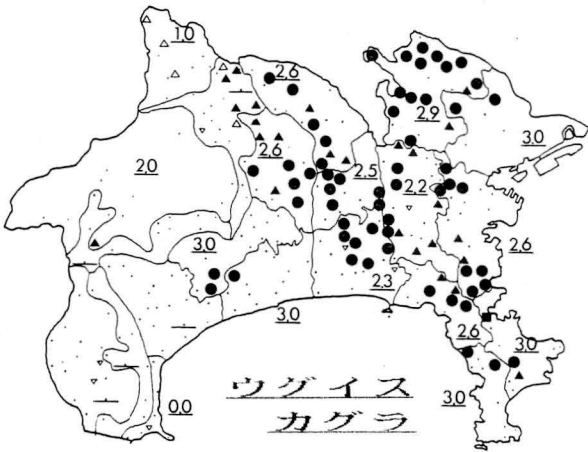
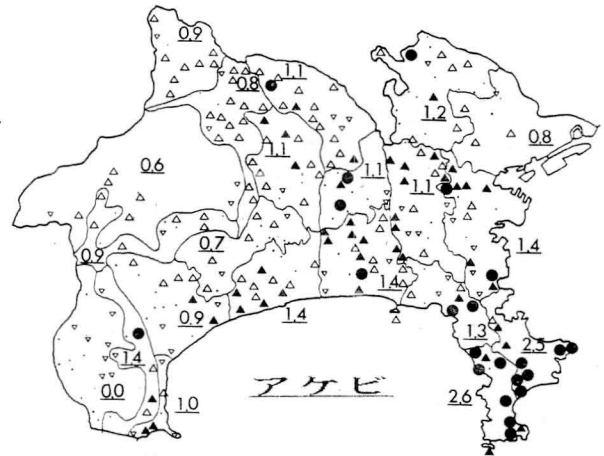
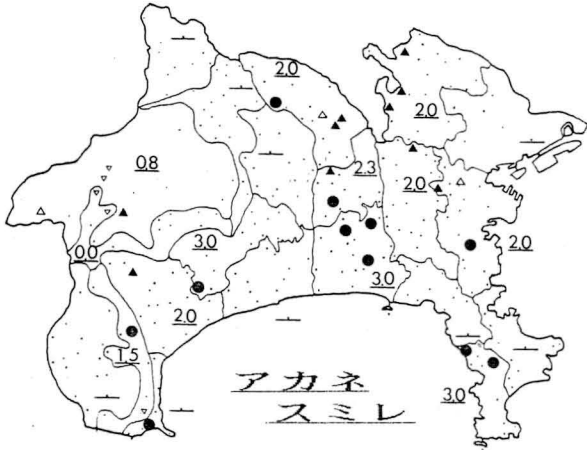
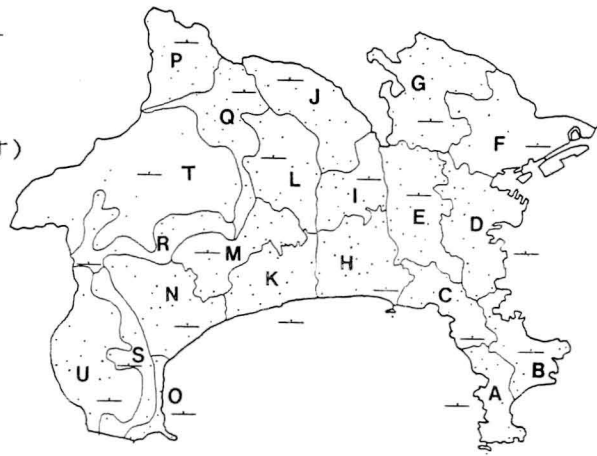
本号の編集は湘南ブロックにお願ひしました。原稿は夏の初めに頂いていたのですが、大変遅くなり申し訳ありません。

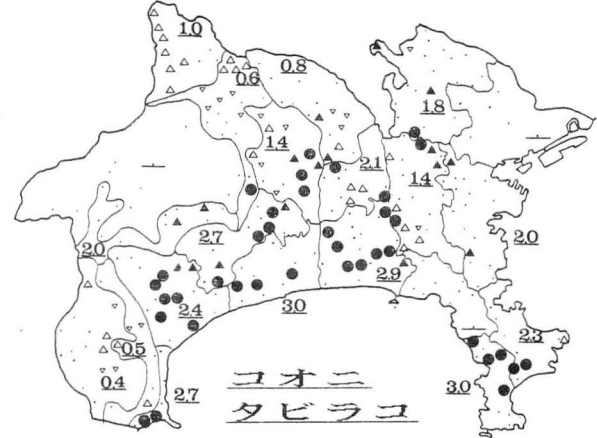
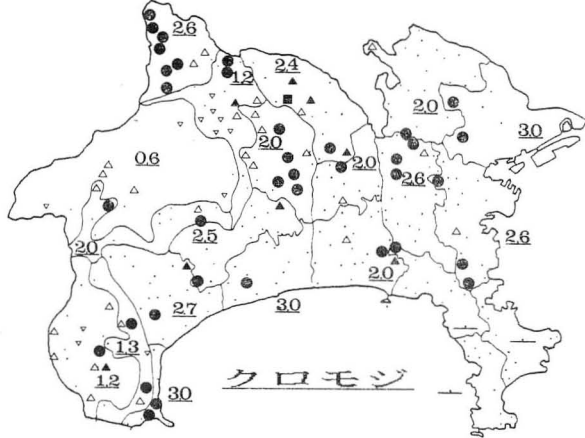
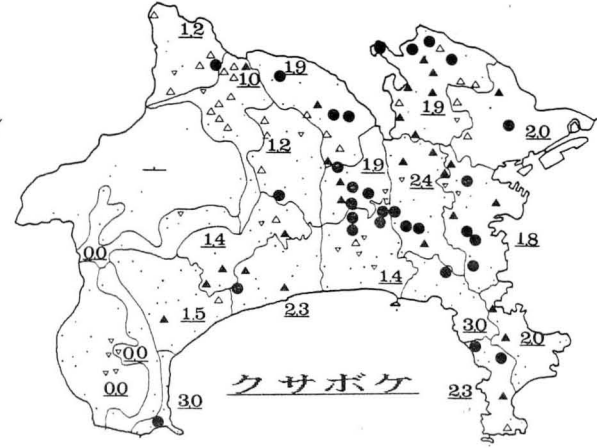
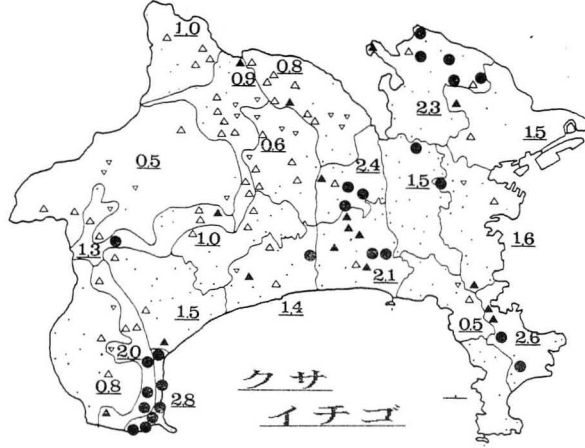
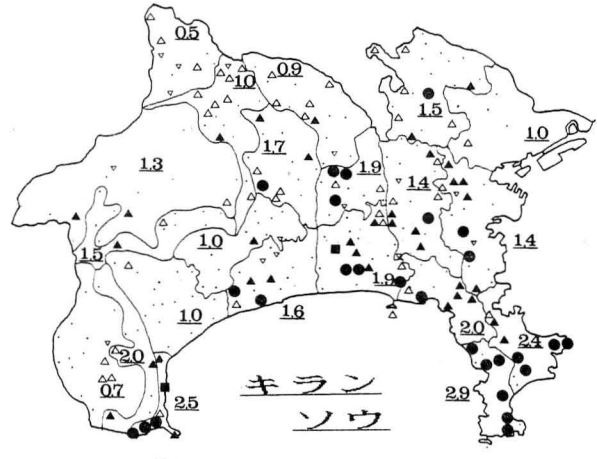
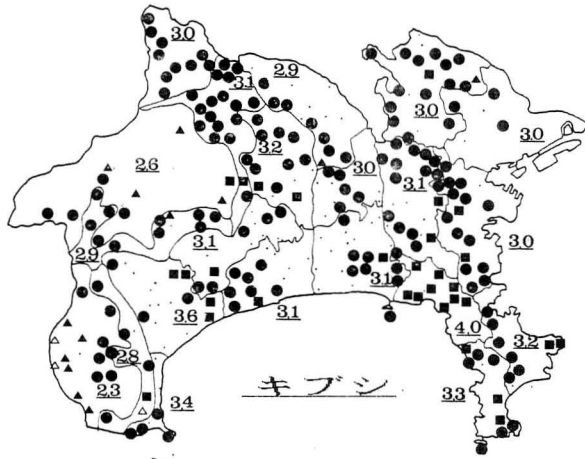
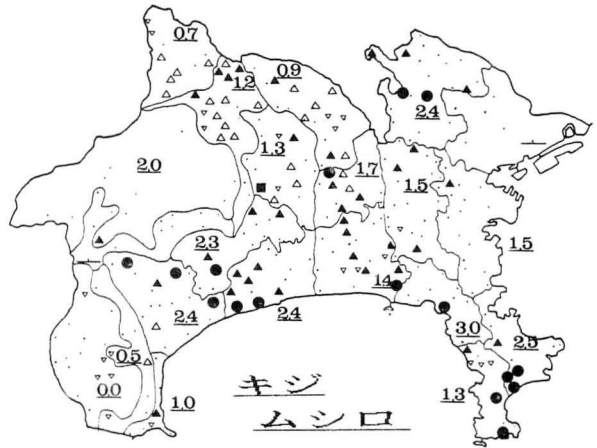
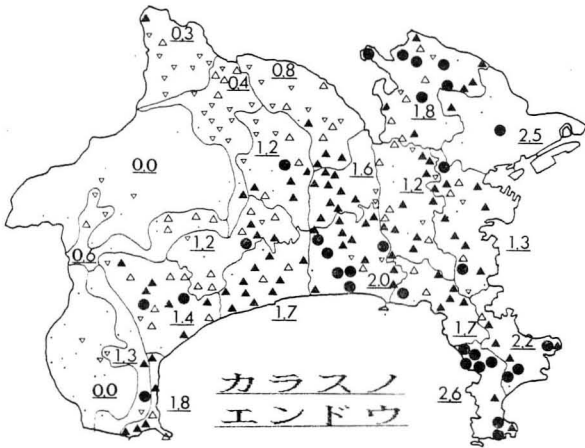
植物誌は、これまでメッシュごとのデータを中心に整理を進めて来ましたが、いよいよとりまとめの段階にさしかかってきましたので、種類中心の整理方法に切り替えて行きます。植物誌の刊行のめやす、内容などについては次の号でお知らせしたいと考えています。

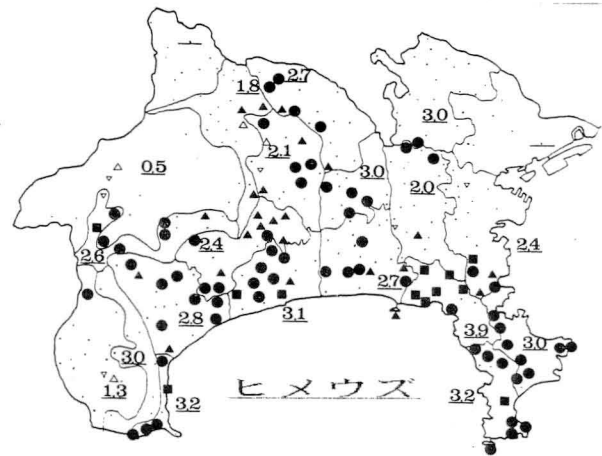
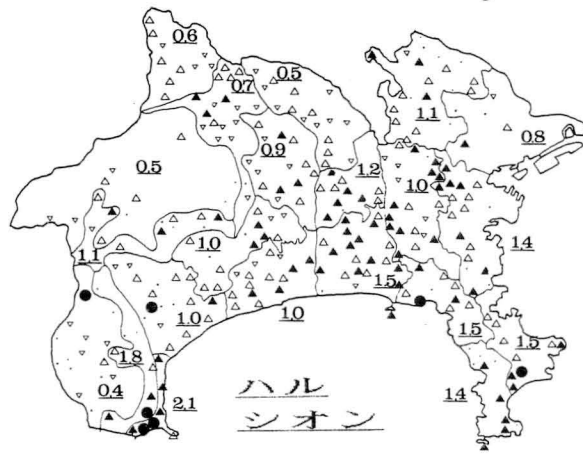
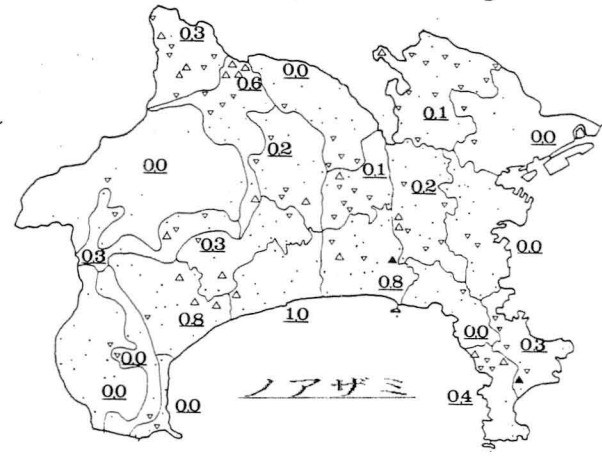
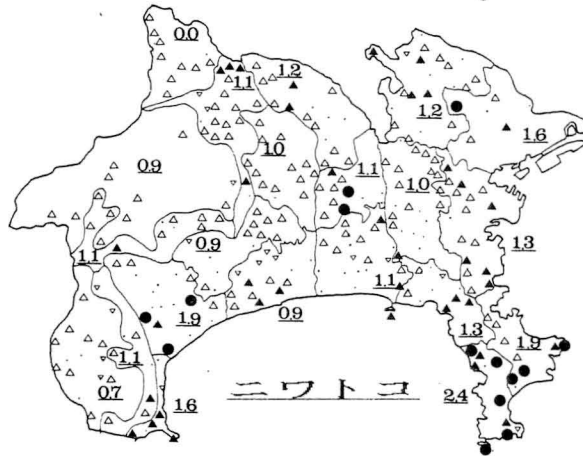
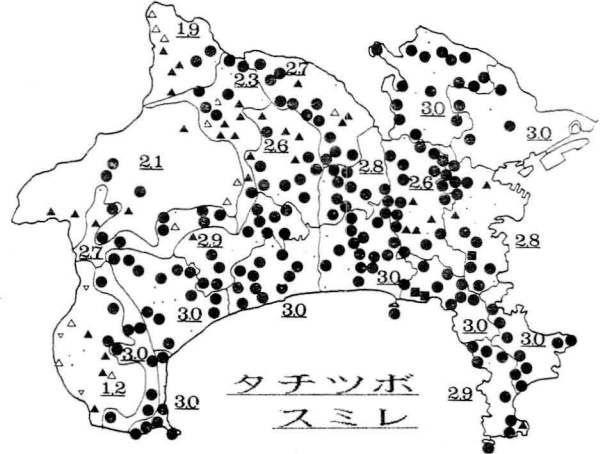
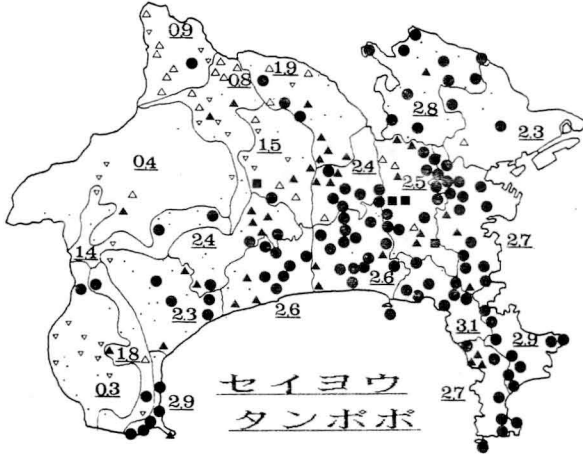
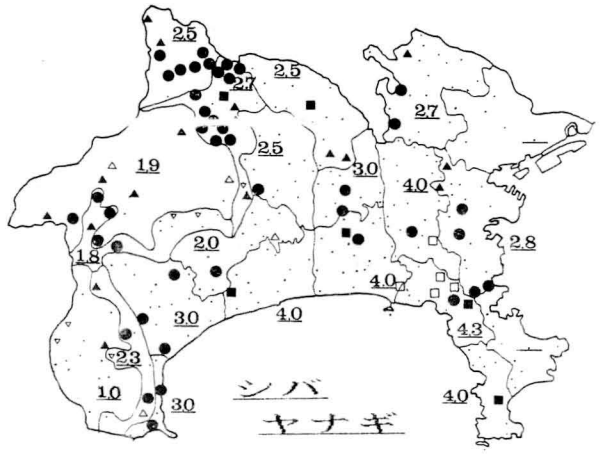
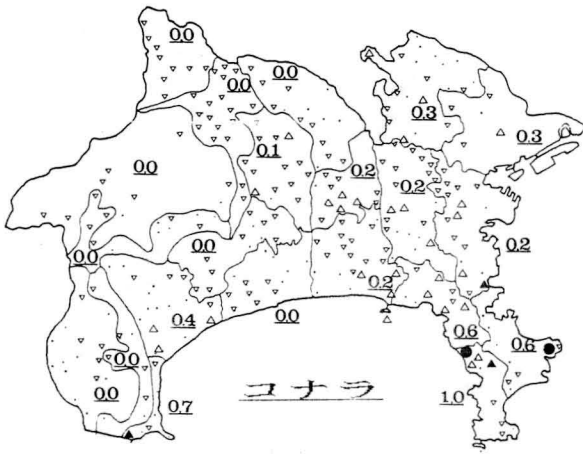
本会代表の一人である松浦正郎さんが佐藤勝信さんとともに、「箱根の植物」と題する本を出版されました。神奈川新聞社のかなしんボックスの7冊めで、箱根叢書の3となっています。新書版263ページで、定価920円です。著者割引で購入できるとのことですが、送料が200円かかりますので、お近くの書店でお買い上げになるのが実際的とおもわれます。ある程度部数がまとまるようでしたら事務局にご連絡下さい。

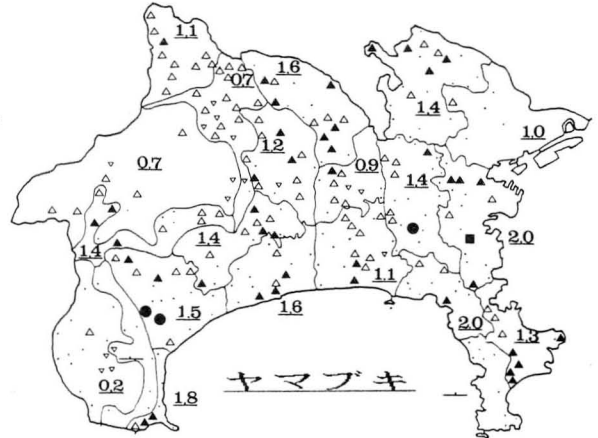
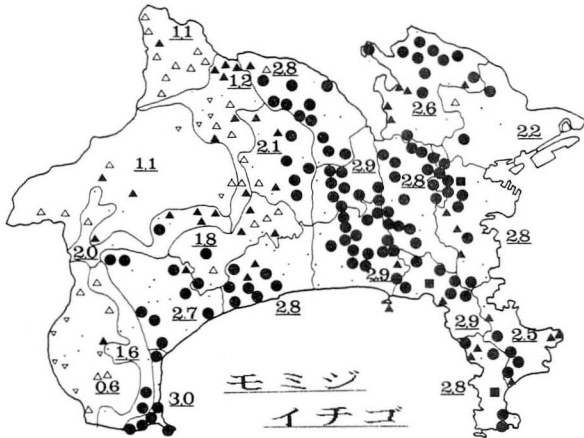
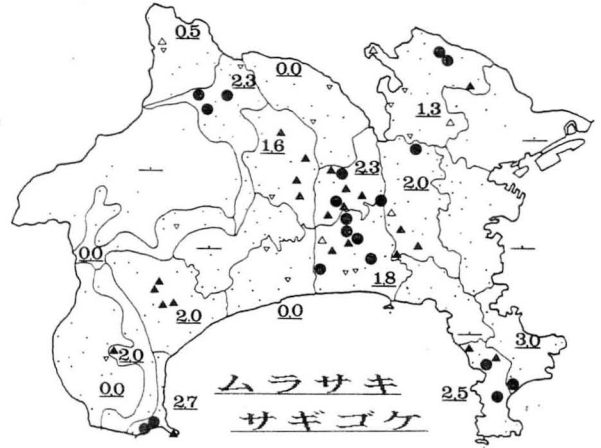
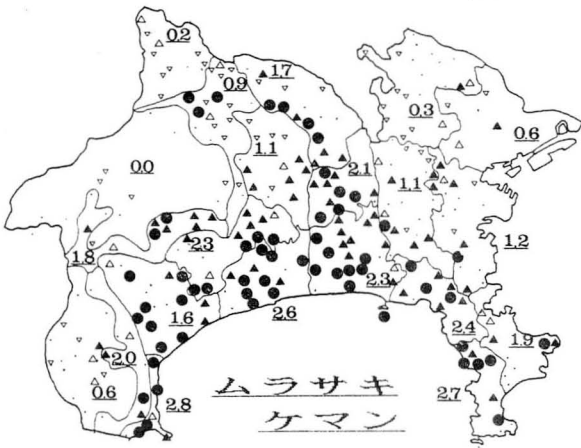
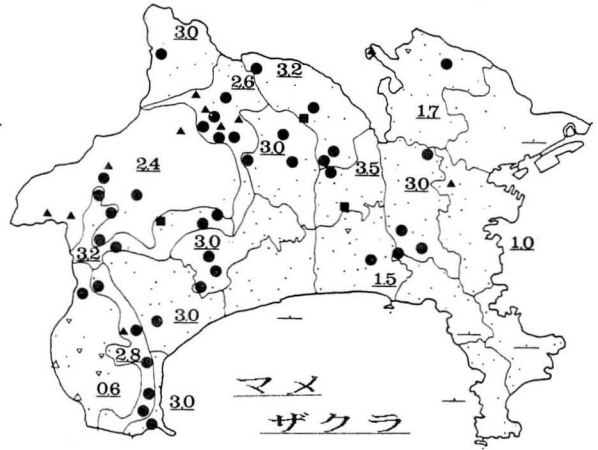
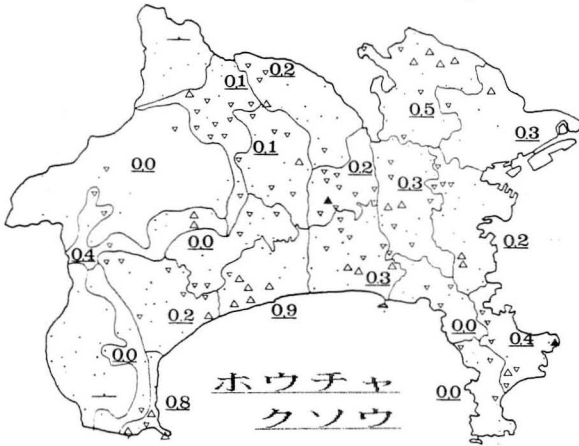
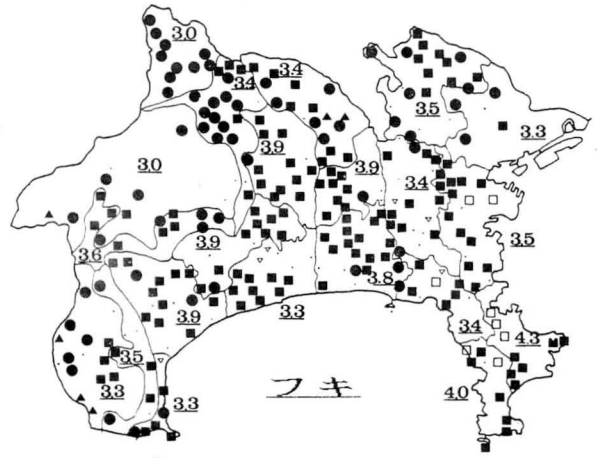
図3. 各種類の開花状況

- 凡例
- A-U 地域区分
 - ・ 調査地点（近接した地点は統合して示す）
 - 開花指数
 - 発見できず
 - ▽ つぼみなし
 - △ つぼみ
 - ▲ 咲始め
 - 満開
 - 咲終わり
 - 若い実









地 域	平地・丘陵 (200m 以下)										山麓 (200-400m)					山地 (400m以上)								
	A 三浦半島西	B 三浦半島東	C 鎌倉・逗子	D 横浜南東	E 横浜南西	F 横浜川崎東	G 横浜川崎北	H 藤沢茅ヶ崎	I 大和海老名	J 相模原	K 平塚・大磯	L 厚木・愛川	M 伊勢原秦野	N 小田原大井	O 湯河原真鶴	平均	P 藤野相模湖	Q 津久井清川	R 丹沢山麓	S 箱根山麓	平均	T 丹沢	U 箱根	平均
※ アカネスミレ	3.0			2.0	2.0		2.0	3.0	2.3	2.0			3.0	2.0	3.0	2.4			0.0	1.5	0.8	0.8		0.8
※ アケビ	2.6	2.5	1.3	1.4	1.1	0.8	1.2	1.4	1.1	1.1	1.4	1.1	0.7	0.9	1.0	1.3	0.9	0.8	0.9	1.4	1.0	0.6	0.0	0.3
☆ ウグイスカグラ	3.0	3.0	2.6	2.6	2.2	3.0	2.9	2.3	2.5	2.6	3.0	2.6	3.0		0.0	2.5	1.0			1.0	2.0	0.0	1.0	
☆ オオドリコソウ	1.3	1.0	0.4	0.3	0.8	0.0	0.4	0.7	0.6	0.0	0.0	0.1	0.3	0.5	0.6	0.5	0.4	0.4	0.2	1.0	0.5	0.0	0.0	0.0
				0.0			2.7	2.0	1.7	0.0	1.0	1.0	0.9	1.0		1.1	1.7	0.0	0.8		0.8	1.0	1.0	
☆☆ カキドウソク	2.0	1.0	2.0	1.2	1.9	0.7	1.7	1.2	1.5	0.9	1.3	0.9	1.6	1.7	0.0	1.3	1.3	1.1	1.1	2.0	1.4	0.0	0.1	0.1
☆☆ カラスムシ	2.6	2.2	1.7	1.3	1.2	2.5	1.8	2.0	1.6	0.8	1.7	1.2	1.2	1.4	1.8	1.7	0.3	0.4	0.6	1.3	0.6	0.0	0.0	0.0
☆☆ キジメソウ	1.3	2.5	3.0	1.5	1.5		2.4	1.4	1.7	0.9	2.4	1.3	2.3	2.4	1.0	1.8	0.7	1.2		0.5	0.8	2.0	0.0	1.0
☆☆ キアザミ	3.3	3.2	4.0	3.0	3.1	3.0	3.0	3.1	3.0	2.9	3.1	3.2	3.1	3.6	3.4	3.2	3.0	3.1	2.9	2.8	2.9	2.6	2.3	2.5
☆☆ キランソウ	2.9	2.4	2.0	1.4	1.4	1.0	1.5	1.9	1.9	0.9	1.6	1.7	1.0	1.0	2.5	1.7	0.5	1.0	1.5	2.0	1.3	1.3	0.7	1.0
※ クサハチゴ		2.6	0.5	1.6	1.5	1.5	2.3	2.1	2.4	0.8	1.4	0.6	1.0	1.5	2.8	1.6	1.0	0.9	1.3	2.0	1.3	0.5	0.8	0.6
☆☆ クサハチゴ	2.3	2.0	3.0	1.8	2.4	2.0	1.9	1.4	1.9	1.9	2.3	1.2	1.4	1.5	3.0	2.0	1.2	1.0	0.0	0.0	0.5		0.0	0.0
☆☆ クロコジャコ				2.6	2.6	3.0	2.0	2.0	2.0	2.4	3.0	2.0	2.5	2.7	3.0	2.5	2.6	1.2	2.0	1.3	1.8	0.6	1.2	0.9
☆☆ コオニタビラコ	3.0	2.3		2.0	1.4		1.8	2.9	2.1	0.8	3.0	1.4	2.7	2.4	2.7	2.2	1.0	0.6	2.0	0.5	1.0		0.4	0.4
☆☆ コナラ	1.0	0.6	0.6	0.2	0.2	0.3	0.3	0.2	0.2	0.0	0.0	0.1	0.0	0.4	0.7	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
※ シバヤナギ	4.0		4.3	2.8	4.0		2.7	4.0	3.0	2.5	4.0	2.5	2.0	3.0	3.0	3.2	2.5	2.7	1.8	2.3	2.3	1.9	1.0	1.4
☆☆ セイヨウタンポポ	2.7	2.9	3.1	2.7	2.5	2.3	2.8	2.6	2.4	1.9	2.6	1.5	2.4	2.3	2.9	2.5	0.9	0.8	1.4	1.8	1.2	0.4	0.3	0.4
☆☆ タチツボ	2.9	3.0	3.0	2.8	2.6	3.0	3.0	3.0	2.8	2.7	3.0	2.6	2.9	3.0	3.0	2.9	1.9	2.3	2.7	3.0	2.5	2.1	1.2	1.7
☆☆ ニワトコ	2.4	1.9	1.3	1.3	1.0	1.6	1.2	1.1	1.2	1.2	0.9	1.0	0.9	1.9	1.6	1.4	0.0	1.1	1.1	1.1	0.8	0.9	0.7	0.8
☆☆ フアザミ	0.4	0.3	0.0	0.0	0.2	0.0	0.1	0.8	0.1	0.0	1.0	0.2	0.3	0.8	0.0	0.3	0.6	0.3	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0
☆☆ ハルシオン	1.4	1.5	1.5	1.4	1.0	0.8	1.1	1.5	1.2	0.5	1.0	0.9	1.0	1.0	2.1	1.2	0.6	0.7	1.1	1.8	1.1	0.5	0.4	0.5
☆☆ ヒメオドリコソウ	3.2	3.0	3.9	2.4	2.0		3.0	2.7	3.0	2.7	3.1	2.1	2.4	2.8	3.2	2.8		1.8	2.6	3.0	2.4	0.5	1.3	0.9
☆☆ ヒメオドリコソウ	2.5	2.6	2.9	2.9	2.8	2.5	3.0	3.2	3.0	2.8	2.9	3.0	3.0	3.0	3.0	2.9	2.5	2.8	3.0	3.5	3.0	2.0	2.0	2.0
☆☆ フキ	4.0	4.3	3.4	3.5	3.4	3.3	3.5	3.8	3.9	3.4	3.3	3.9	3.9	3.9	3.3	3.7	3.0	3.4	3.6	3.5	3.4	3.0	3.3	3.1
☆☆ ホウチャクソウ	0.0	0.4	0.0	0.2	0.3	0.3	0.5	0.3	0.2	0.2	0.9	0.1	0.0	0.2	0.8	0.3		0.1	0.4	0.0	0.2	0.0		0.0
☆☆ マメザクラ				1.0	3.0		1.7	1.5	3.5	3.2		3.0	3.0	3.0	3.0	2.6	3.0	2.6	3.2	2.8	2.9	2.4	0.6	1.5
☆☆ ムラサキマングケ	2.7	1.9	2.4	1.2	1.1	0.6	0.3	2.3	2.1	1.7	2.6	1.1	2.3	1.6	2.8	1.8	0.2	0.9	1.8	2.0	1.2	0.0	0.6	0.3
☆☆ ムラサキマングケ	2.5	3.0			2.0		1.3	1.8	2.3	0.0	0.0	1.6		2.0	2.7	1.7	0.5	2.3	0.0	2.0	1.2		0.0	0.0
☆☆ モミジキ	2.8	2.5	2.9	2.8	2.8	2.2	2.6	2.9	2.9	2.8	2.8	2.1	1.8	2.7	3.0	2.6	1.1	1.2	2.0	1.6	1.5	1.1	0.6	0.8
☆☆ ヤマブキ		2.0	1.3	2.0	1.4	1.0	1.4	1.1	0.9	1.6	1.6	1.2	1.4	1.5	1.8	1.4	1.1	0.7	1.4		1.1	0.7	0.2	0.4
※ 雑木林開花指数	2.3	2.2	2.2	1.9	1.9	1.7	2.0	1.9	1.9	1.7	2.1	1.5	1.6	2.0	2.2	2.0	1.3	1.3	1.6	1.6	1.4	1.0	0.8	0.9
☆☆ 農耕地開花指数	2.3	2.0	2.0	1.6	1.7	1.4	1.7	2.0	1.9	1.3	1.9	1.4	1.8	1.8	2.0	1.8	1.0	1.1	1.4	1.6	1.3	0.7	0.7	0.6

開花指数は、つばみなし:0, つばみ:1, 咲き始め:2, 満開:3, 咲き終わり:4, 若い実:5 として平均
 雑木林開花指数は、※をつけた13種の平均 農耕地開花指数は、☆をつけた12種の平均

『湘南植物誌』について

湘南ブロックで収集された標本は、平塚市博物館で整理、保存されているが、博物館で多少の印刷費を予算化することができたので、標本の目録を発行することになった。その第1冊目として 合弁花類の記録をまとめたのが今年3月に発行した「湘南植物誌 I」である。県全体の進行から言うと、いささか先走りの感もあるが、植物誌の形式の試行という意味もあり、また他のブロックの調査にも多少は役立つのではないかという判断もあって、湘南ブロックの調査員の方々の賛同を得て、発行に踏み切ったものである。

「湘南植物誌」をまとめるにあたっては、従来の各地で発行されている植物誌とは一味違う特色を出したいと思ひ、いくつかの工夫を試みてみた。具体的な体裁の例は下図に示した通りだが、1種についての内容として、簡単なコメント、各メッシュの標本データ、分布図、一部の種には解説図を盛りこんだ。

コメントは、その種についてのごく一般的な短い解説のほか、湘南地方での分布状況、生育環境にふれるようにした。また分類学的に問題の多い種については、なるべく具体的に、どういう特徴によってその種と判断したかを述べるようにした。

標本データは、分布図の根拠となった標本を示すもので、各メッシュにつき1点ずつ、採集年月日、採集地、採集者、標本番号を記載した。また、その標本に花や実がある場合、△○×※の記号を用いてその状態を示した。この情報は開花期など植物季節を知るうえで有用だと思う。こうした1点1点の標本データを記載する方法は、故倉田悟氏、中池敏之氏の指導のもとに、日本シダの会の手によって発行されている「日本のシダ植物図鑑」（東京大学出版会。予定の全8巻のうち4巻まで発行）にならったものである。標本の再検討を可能にし、自然史的な情報の確実な蓄積をはかっていくためには、重要な方法であるが、一面で貴重種の無用な乱獲の手がかりを作ってしまうという心配もある。今後、まとめる予定のラン科などについては、情報の一部は伏せる必要があると考えている。

分布図は、湘南ブロックの24メッシュを地図として示し、その中に分布をプロットしたが、ただ、あるかないかというだけではなく、多い、普通、少ない、稀の4段階にわけて、マークを変えて産量の多少を示すようにした。湘南ブロックの場合は、各メッシュの担当者が少なくとも2～30回はメッシュの中を歩き回り、調査を行って

「湘南植物誌」のページ構成の例

406. オオオナモミ *Xanthium canadense* Linn.

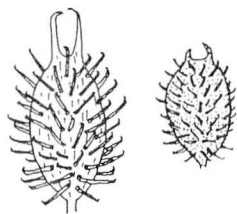
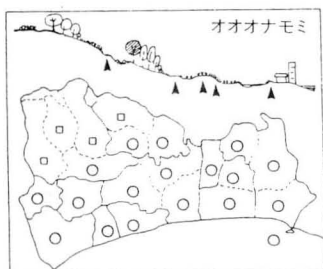
北米原産の帰化植物で、道端、空地等に生える一年草。全域の人里近くに広く分布し普通。9月頃、花をつける。在来種のオナモミは、いが（総苞の合着した莖状体）の刺が1～2mmで短かく、また面に毛が多くて光沢がないことで区別できるが、本調査ではまったく発見できなかった。

大井：83108 篠籠※山口4677。中井：831027 鴨沢※三輪4656。小3：83919 小竹○浜口4657。
泰2：811011 菩提※守矢4668。泰3：831020 名古木※守矢4679。泰4：791021 三廻部※佐々木4664。
泰5：81928 今泉※住吉4666。伊1：791028 上粕屋※守矢4660。伊2：841014 東富岡※守矢4997。

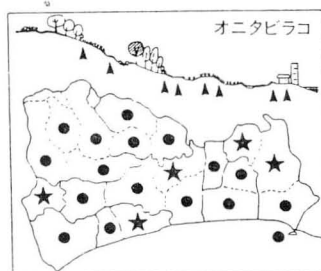
407. オニタビラコ *Youngia japonica* (Linn.) DC.

道端、畑、空地等に生える一〜越年草。丹沢の高所を除く全域に広く分布し普通。4～10月に黄色い花をつけるが、日あたりのよい所では冬期も開花している。

大井：83918 山田○山口4696。中井：83519 井ノ口○※齋木4708。小3：83523 国府津○浜口4706。
泰2：811011 菩提○守矢4693。泰3：80517 東田原○大原4689。泰4：8053 柳川○佐々木4695。
泰5：80427 尾尻○住吉4680。伊1：79415 日向○守矢4697。伊2：82514 岡崎○守矢4698。



オオオナモミ(左)とオナモミ(右)
の果実



る。従ってどの植物が全体的にどの程度の量、産するかということに、かなりの確かな情報をつかんでいる。それは主観的な印象という一面を持つとはいえ、得難い貴重な情報なので、分布図にそれを反映したいと考えたわけである。具体的には、各担当者に一覧表を渡して多い少ないを記入してもらい、それを全体的に調整して、図を作成した。また自然分布している種と、帰化植物のような移入種はマークを黒と白に分けることで区別して示すようにした。分布図と組み合わせると、生育環境が一目でわかるような模式図も工夫してみた。

いささか、自画自賛になるが、このようなデータと図を組み合わせることで、親しみやすく、わかりやすい「植物誌」にできたのではないかと思っている。生育環境の図などは、県全体の植物誌にも入れられたらよいのではとも思う。

さて、こうした植物誌をまとめるまでの、湘南ブロックでの整理手順について少し紹介してみたい。集められた標本はすべて、種毎の包みに分けて、収蔵室の棚に整理され、その総数は現在約18000点になっている。目録を作成するため、昨春から、この標本に通し番号を打つことと、ラベルのコピーをとり、標本の控えとしてのカードを作ることを始めた。

標本は、シダ植物は守矢淳一先生、種子植物は浜口が、一点一点改めて全て目を通して、同定の間違いや疑問なものをチェックし、不明なものは初山泰一先生、県博の高橋秀男、大場達之両先生に目を通していただいた。そのうえで、ラベルの右上と、標本を包んでいる新聞紙の内側の右下すみに、ナンバリングで同一番号を印した。番号はFKS（フロラ、カナガワ、湘南）の1からの通し番号とし、現在、全体の約3分の2にあたる12000までナンバリングがおわっている。

ナンバリングと同時にラベルをいったん標本から抜き出し、これのコピーをとった。コピーは8枚並べて0.8倍に縮小コピーし、それを切り離してB7版のカードとして、種毎にカードケースに整理してある。その後、再び、ラベルを標本に戻す作業を行った。

これらの膨大な仕事量は、守矢先生始め、斎木操氏、斎藤溢子氏、三輪徳子氏、山口育子氏らが毎月2～3日ずつボランティアとして、作業にあたってくださってきた。

植物誌の標本データの部分は、こうして作ったカードを原稿に起こし、印刷したものである。今年度からは、博物館にマイコンが導入されたので、カードに基づき情報をワープロで打ち、印刷の版下を直接作成することを始めた。—cosmosというリレーショナルデータベース使えるようになったので、ワープロで打った情報は後日、

カード形式のデータベースに転送し、いろいろな形の検索が可能ないようにしようかともかんがえている。

植物誌をまとめるまでの作業手順について紹介してきたが、突き詰めて言えば、標本自体に何度も目を通してということが、一番大事なのだと思う。ごく単純な勘違いで、全然違う科の包みに標本がまぎれこんでいることもある。一種類について、10枚も20枚もの標本を見ていると、同定の間違いも発見しやすい。できることなら、複数の目で、標本を一から見直す、県全体の植物誌をまとめるにも、それが欠かせない仕事だろう。

☆「湘南植物誌」の入手を希望される方へ

現金1000円（頒価800円、郵送料200円）を添えて下記へ。

〒254 平塚市浅間町12-41 平塚市博物館 浜口

(浜口哲一)

湘南植物誌と藤沢の植物

○湘南植物誌Iにもれた藤沢の植物

マルバアサガオ・センダングサ・ホウキギク・アカミタンポポ 以上FU-1・2・3, ミゾコウジュ FU-1・3, ヒメジソ・コヤブタバコ 以上FU-2・3, ヒルガオ・アメリカネナシカズラ・タツナミソウ・トキワハゼ・ビロードモウズイカ・オオフタバムグラ・シロノセンダングサ 以上FU-1, イボタノキ・ハマヒルガオ・レモンエゴマ・センナリホウズキ・ヤマムグラ・ヤエムグラ・ヤマホタルブクロ・コオニタビラコ・ノゲシ 以上FU-2, イチヤクソウ・オオバイボタ・ヒイラギ・ツルニチニチソウ・マルバルコウソウ・アブノメ・アゼトウガラシ・ムラサキサギゴケ・フタバムグラ・キカラスウリ・ミゾカクシ・カワラヨモギ 以上FU-3, ネズミモチ・メハジキ 以上EN.

○湘南地区で藤沢にしか見られない合弁花植物

ミナトタムラソウ・ケイワタバコ・キンケイギク・ブタクサモドキ 以上FU-3, ギンリョウソウ・イヨカズラ・ハマコンギク 以上EN, イソギク・ハマボッス FU-3・EN

以上の記載は、湘南植物誌Iより拾い出したもので、今後の調査次第で多少訂正されていくと思われます。

(根本平)

最近見た色変わり品種

調査会に協力する以前より、奇形や色変わりなどの変異種株を時々見かけることがありました。その中で最近出会ったものを紹介いたします。一つは中井町で見た、オトメカンアオイ（仮称ナカイカンアオイ）*Heterotropa savatieri* (Franch.) F. Maekawaの紫赤色の色素が抜けた物で青軸青花品種（f. *viride*）となったものです。この青軸青花品種は、江戸時代より「細辛」とよばれて、栽培され、今日でも150品種ほどが残っており、古典園芸の一つとなっています。またその多くは、カントウカンアオイ（スズカカンアオイ）とヒメカンアオイだと言われています。

秦野市では黄斑入りのイヌワラビを見ました。ニシキシダ (*Athyrium nipponicum monstr. metalliolum* (Makino) Nakaike)の斑とは違い不定形の黄色の斑が入るもので、この斑は安定しており遺伝もするので、自生地近くにまだ産する可能性もあります。その他伊勢原でシロバナナガバノスミレサイシン、シロバナタチツボスミレ、秦野市でモモイロタチツボスミレ、オトメスミレ、モモイロオカスミレ、ホソイスミレ、モモイロツユクサ、斑入りツユクサ、白花ツリガネニンジン、斑入りツリガネニンジンなどがありました。（小清水康夫）

街路樹から並木へ

以前、横浜に通っていた頃、山下公園前でイチョウ並木の下を落葉を踏みしめ、歩いたことがある。樹齡を重ねた大きなイチョウの木々が続く「イチョウ並木」という感がある。

残念なことに、私の住む秦野には、並木と言える樹々が並ぶところはない。“街に緑を”“自然を”ということから、商店街にもやっとな樹木が植えられ、急速に広がって行く住宅地や工場地域の道路には、計画的に街路樹が見られる様になってきた。

植栽樹の種類には、何種かあげられるが、二つの傾向がみられる。そのひとつは旧市内に見られるもので、サクラ、シダレヤナギ、イチョウなどの落葉樹、サザンカ、ツバキなどの常緑樹である。一方、最近開けた、市周辺部の住宅地や工場地域には、ハクウンボクやユリノキ、サクラなどの落葉樹、ツバキ、マテバシイ、ビャクシン、カイズカイブキなどの常緑樹が見られる。低木類と二層に植えられているところも部分的にあり、低木には、ヒラドツツジやサツキ、イヌツゲなどが、植え込まれている。

歩道に植えられる街路樹の中でも、道路建設の計画の際に植栽されているところは、それなりの歩道の幅が確保されているが、後から植えられたところは幅が狭かったり、歩行者の邪魔になるなどで、いろいろな困難があるようだ。

サクラ、イチョウ、ハクウンボク、ユリノキ、ツバキなどかなりの高さまで成長する樹種などは、枝葉をひろ

げたとき、枝先は、また切り落とされてしまうのだろうか。

車道との間に、緑と花の境を作り、歩行者に木陰と静かさを与えるまで、自由に大きくなってほしいと願う。

私の子供の頃過ごした秦野には桜土手というのがあり、堀の両側に百本を越す桜が花を開いていた。今、市の道路沿いに植えられている桜は、八重桜が多い。桜土手の桜は、ソメイヨシノであった。花ふぶきがまい、花びらを集めたことをおぼえている。

街路樹には、公害に強いということで、マテバシイやキョウチクトウなどの樹種が選ばれるが、東京、横浜の大都市のまん中で、排気ガスなどの大気汚染がひどいところならそれもいだろうが、秦野はまだまだ空気がきれいなので、公害に強い樹木を植えるのではなく、秦野のイメージに合った町作りとしての並木作りをしたらどうだろう。明るい感じを与え、しかも、その土地の土壌や気候条件にあっているものということで、町の付近で見られるものはどうだろうか。郊外の林には、落葉樹ではシデ類やケヤキ、エノキ、ヤマザクラ、また、丹沢山には、ヒメシャラなど美しい樹もみられる。そのような中から、樹種を選んでいったらどうだろう。

これら樹々が芽ぶき、葉を開き、花を咲かせ、実を結び、紅葉していく姿を歩きながら楽しむことができると、なんとすばらしいことだろう。

私たち市民に、心のやすらぎを与えてくれる並木らしい大きな木々に育ててほしい。（佐々木あや子）